４０	学校名 福岡県立東鷹高等学校	22 ～ 24

平成２４年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

高等学校における特別な教育的ニーズに対応するための教育課程及び指導方法に関する研究開発

２　研究の概要

生徒自身が将来の自立に向け、自己の在り方生き方を考え、社会生活で必要なスキルを身に付けることができる教育課程及び指導方法について実践的研究を行う。

学校の教育活動すべてを通じてキャリア教育を推進すると共に、全学年を対象として総合的な学習の時間等を活用し、ソーシャルスキルトレーニング（以下ＳＳＴ）及びライフスキルトレーニング（以下ＬＳＴ）を実施する。

中学校とのつなぎ教材の活用や少人数指導の工夫と改善を図り、すべての生徒にとってわかりやすい授業づくりを推進する。

総合選択制の自由選択科目群として、特別支援学校学習指導要領の自立活動の内容を参考にした、学校設定領域「キャリアデザイン」（以下「キャリアＤ」）を開設し、特別な教育的ニーズのある生徒を対象に適用する。

研究の実施においては、分掌を越えたワーキンググループ（以下ＷＧ）を編成して、役割を分担した。

３　研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

ア　目的

本校は、平成１９・２０年度文部科学省委嘱「高等学校における発達障害支援モデル事業」を受け、高等学校における特別支援教育を推進する取組を行った。

その結果、発達障害に対する教職員の理解や認識が深まり、特別な教育的ニーズのある生徒への支援に対する意識も高くなってきた。

しかし、対象となる生徒に対しての具体的支援策が十分に進んでおらず、また、他の生徒や保護者に対しても、発達障害等の特別な教育的ニーズのある生徒への支援について理解を促すための啓発ができていないことが課題となっていた。

そこで本研究では、学校の教育活動すべてを通じたキャリア教育の推進を行いながら、対象となる生徒への具体的な支援を目指した教育課程及び指導方法の開発を行う。

イ　仮説

(ｱ) 第１学年の総合的な学習の時間等を活用し、イントロダクションレッスン（以下ＩＬ）を実施することで、生徒自身が将来の自立に向け、自己の在り方生き方を考え、社会生活で必要なスキルを身に付けることができる。

第１学年のＩＬは、生徒の気付きと自己理解を促すとともに、特別な教育的ニーズのある生徒が、２年次より開講する「キャリアＤ」を選択することの重要性を学ぶことができる。

第２学年と第３学年の総合的な学習の時間を活用し、ＳＳＴを実施することで、他者とのコミュニケーションを図る能力を高めるとともに、社会規範やマナーの必要性を理解し、適切な他者対応の仕方を見つけさせることができる。

(ｲ) 総合選択制自由選択科目群として、第２学年・第３学年において「キャリアＤ」を開設することによって、受講生徒自身が自己の在り方生き方を考え、社会生活で必要なスキルを

身に付けることができる。

併せて「キャリアＤ」の授業づくりにおいて得る成果や課題は、教職員全体に還元することによって、教師自身の授業スキルとして生かすことができる。

(ｳ)「キャリアＤ」の受講希望を募るための説明を、生徒及び保護者に行うことを契機として、特別支援教育を根幹に据えあらゆる生徒の教育的ニーズに対応しようとする本校の教育姿勢を示すと共に、発達障害に関する啓発と理解を促すことができる。

(ｴ) つなぎ教材の活用による学び直し、少人数授業、習熟度別指導、ティームティーチング等を工夫、改善することにより、わかりやすい授業を実現できる。

(ｵ) 関係機関等との連携を通し、対象生徒の適性、進路希望、実態等を総合して個別の教育支援計画を作成することによって、共通認識をもった指導を実現することができる。

(2) 教育課程の特例

第２学年と第３学年での自由選択科目群の中に、学校設定領域「キャリアＤ」を開設する。

学校設定領域の「キャリアＤ」は、少人数で生徒の教育的ニーズに応じた特別支援学校学習指導要領の自立活動を取り入れ、小・中学校の通級を参考にした指導を行い、将来への準備としてＳＳＴ及びＬＳＴを基本としたコミュニケーション活動、進路設計、就労体験等を行う。

学校設定領域「キャリアＤ」では、自立活動の６区分中の「人間関係の形成」、「コミュニケーション」、及び「心理的な安定」を中心に、個々の生徒に必要な区分・項目を相互に関連付けながら進める。また、学力的な課題に対しては学力補充も考慮して行う。

４　研究内容

(1) 教育課程の内容

第１学年においては、総合的な学習の時間にキャリア教育の一環としてＳＳＴ・ＬＳＴを体験するＩＬを実施する。その活動の中で生徒自身の気付きと自己理解を促し、第２学年と第３学年で学校設定領域「キャリアＤ」を選択することを自ら決定させる。第２学年と第３学年では、総合的な学習の時間にクラス・学年単位でキャリア教育の一環としてＳＳＴ・ＬＳＴを取り入れた活動を実施する。

第２学年と第３学年の総合選択制自由選択科目群の実施時間帯に学校設定領域「キャリアＤ」を実施する。少人数で実施し、生徒の教育的ニーズに応じ特別支援学校指導要領の自立活動を取り入れ、小・中学校の通級を参考にした指導を行う。

指導内容は、将来の社会生活への準備となるＳＳＴ・ＬＳＴを基本としたコミュニケーション活動、進路設計、就労体験等である。

また、「キャリアＤ」を自由選択科目群の一つとして開講することにより、特別な教育課程であるという意識をもたせないようにし、受講する側の心理的抵抗感を軽減する。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第１年次	・校内の研究委員会等の体制構築（科目設定、学習指導体制検討、評価アンケート実施計画、アンケート作成） ・先進校視察 ・小・中学校通級指導教室、キャリア教育推進校視察・見学 ・特別支援学校等外部機関との幅広いネットワーク形成 ・外部機関及び学習支援員の活用方法の検討 ・各学期１回、クラス単位で年間１５回程度のＩＬ（キャリア教育、ＳＳＴ等）実施 ・総合的な学習の時間等を活用した、個別支援の検討と実施 ・特別支援学校の自立活動を参考にした、科目の教材開発

	・職員研修会の実施 ・特別支援学校の自立活動を取り入れた科目の学習内容及び評価に関する検討会開催 ・保護者説明会（選択科目履修及びキャリア教育）の実施 ・中学校との情報交換及び生徒の実態把握 ・次年度の教育課程への位置付け検討 ・つなぎ教材の活用 ・少人数授業の在り方検討 ・第１年次研究成果と課題のまとめ
第２年次	・第１年次の課題を踏まえた校内体制等の修正 ・「キャリアＤ」の履修開始 ・総合的な学習の時間等を活用したＩＬの実施 １学年：クラス単位で年１５回程度実施 ２、３学年：クラス単位で年８回実施、学年単位で２回の講演会 ・外部機関の効果的な活用方法（第１年次の課題を踏まえて検討） ・ガイダンスや保護者会等の機会を利用しての生徒・保護者に対する理解及び啓発の促進 ・つなぎ教材の活用 ・職員研修会の実施 ・少人数授業の在り方検討 ・中間報告会の実施 ・第２年次研究成果と課題のまとめ
第３年次	・第１・２年次の課題を踏まえた「キャリアＤ」の検討 ・外部機関と連携した指導の実践 ・つなぎ教材の発展的活用 ・少人数授業の実践 ・職員研修会の実施 ・３年間の研究成果と課題のまとめ ・最終年度報告会の実施 ・事業終了後の取り組み内容の検討

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第１年次	・職員アンケートを年度初めと年度末に行い、研究体制の検証及び評価を行う。 ・職員アンケートを年度末に行い、関係機関との連携について検証及び評価を行う。 ・生徒にＩＬの事後アンケートを行い、その効果について検証及び評価を行う。 ・確認テストを学期末に行い、つなぎ教材の検証及び評価を行う。 ・外部機関の評価によって本研究の検証を行う。
第２年次	・受講者のスキル習得状況確認アンケート及び評価を、各学期当初と学期末に行い、「キャリアＤ」の授業内容や効果を検証及び評価を行う。 ・受講者とその他の生徒に学校生活アンケートを行い、変容を比較し「キャ

	リアＤ」の検証及び評価を行う。 ・生徒と職員にＩＬ及びＳＳＴの事後アンケート行い、その検証及び評価を行う。 ・各教科担当者アンケートを行い、つなぎ教材の検証及び評価を行う。 ・職員アンケートを年度末に行い、外部機関のネットワーク活用の有効性の検証及び評価を行う。
第３年次	・生徒アンケートを学期末毎に行い、少人数授業の有効性について検証及び評価を行う。（キャリアＤ） ・受講者のスキル習得状況確認アンケート及び評価を各学期当初と学期末に行い、「キャリアＤ」の授業内容や効果について検証及び評価を行う。 ・受講者とその他の生徒に学校生活アンケートを行い、変容を比較し「キャリアＤ」の検証及び評価を行う。 ・第３学年生徒を対象に、入学時と現在のソーシャルスキル等の定着について意識調査を実施して、ＳＳＴの有効性について検証及び評価を行う。 ・研究開発前後の教師の意識についてアンケートを実施して、研究開発による教師の意識の変容を検証及び評価する。 ・外部機関の評価によって「キャリアＤ」の教育課程の位置付けを検証する。 ・生徒にＩＬの事後アンケートを行い、効果の検証及び評価を行う。

５　研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア　生徒への効果

ＩＬ・ＳＳＴの実施によって、生徒が自己理解・他者理解を深め、人間関係づくりや学校生活におけるマナー、ルール、及び必要なスキルを理解して、他者との関係づくりへの意欲やコミュニケーション能力が向上している。

また、特別な教育的ニーズのある生徒たちが、学校設定領域「キャリアＤ」において、教師との対話、生徒間の交流、及び体験活動等によって、自己理解をさらに深めて、小さな成功体験を積み重ねることによって、自信と意欲を高めたといった効果が見られている。

(ｱ) ＩＬの実施について

①第１学年における自己理解と他者理解が深まっている。ＩＬまとめアンケートでは、ソーシャルスキルを身に付けることの必要性を感じている生徒が前年度・本年度で平均９５%程度であったことは、生徒が自己を見つめ、自分と向き合っている姿である。

生徒アンケートで「入学時と今を比べ、以前より自分のことを理解できていると思う」と回答している生徒は、前年度・本年度で９０%程度である。教師アンケートにおいても、「生徒の自己理解が深まった」と回答した教師は、前年度・本年度で８０%以上であることから、ＩＬによって、生徒が自己を振り返り、自己理解を深めていると考えられる。

生徒の感想には、初年度より、「今まで気付かなかった自分の性格や考え方及び他者から見た自分の長所を知ることができた。短所は改善したいと思う」等の意欲的な態度を示す感想が得られている。

②次年度に設定されている自由選択科目群の中から学校設定領域「キャリアＤ」を受講するキャリアＤ動機づけの役割について、一定の効果はあったといえる。第１学年で受講希望を示した生徒が、１年次・２年次で平均３割程度であった。

③さらに、ペアやグループでの活動で他者との関係づくりの楽しさを体験することが、生徒にコミュニケーションの重要性に気付かせ、人と関わることへの抵抗感を軽減していると考察される。ＩＬのおかげで友人作りがスムーズだったと感じている感想は、３か年いずれの感想にも見られた。また、教師も生徒がお互いを知る交流の機会になっていると感じており、さらに、生徒が自己表現することに慣れてきた様子を報告している。

④外部講師による講演会の事後アンケートでも、「自分のことを振り返ることができた」、

「学んだことをこれからの日常生活で活かそうと思う」と回答した生徒が３か年の間、すべての学年において平均９割以上であり、生徒が自己を見つめ、人間関係づくりへの意欲を高めていると判断される。

(ｲ) つなぎ教材の活用について

前年度と同様に第１学年を対象に国語・数学・英語において実施し、「自分にとって役立っている」との回答が平均９割、「中学の時にわからなかったことがわかるようになってきた」との回答が平均８割程度、前年度と本年度に得られた。以上のことから、中学校から高校への学習面でのスムーズな移行が進みつつあると判断される。

(ｳ) ＳＳＴの実施について

①第２学年と第３学年生徒はクラスメートとのグループ活動等を楽しみながら、他者とのコミュニケーションの重要性を感じ、他者との関係づくりを改善しようと努めている。生徒はアサーション等を知ることによって自己を振り返り、自らの人との接し方・話し方が他者に与える影響を認識しつつある。

学んだスキルをすべて活用できているとは限らないが、生徒が人間関係づくりへの意欲を高め、積極的に他者とかかわろうとする姿は窺えた。

その参考データとして、第３学年と第２学年を対象としたソーシャルスキル定着状況を確認する「スキルシート」の結果がある。「集団行動」、「仲間関係」、及び「コミュニケーション」の３点について生徒が自己点検を行う形式であり、２か年の間に両学年共３回ずつ実施した。換算表は中学生用であるため参考程度に止まるが、「集団行動スキル」と「コミュニケーションスキル」については、評価点（１～１７）が微増ではあるが向上傾向にあり、生徒の意識や意欲の変容を示していると考える。

②在学３か年にわたりＳＳＴ指導を受けてきた第３学年生徒を対象に、入学時と現在を比較させたアンケートによれば、入学時よりも「誰に対しても自分から挨拶ができる」は５１％向上し、「自分の考えや思いを、正確に伝えられる」は３２％、「他の人と人間関係を上手く築くことができる」は１９％程度向上しており、前述の生徒の意識の変容を裏付けていると考察される。

(ｴ) 「キャリアＤ」の実施について

他者との人間関係づくり、学校生活への適応、及び自分をコントロールすることについて課題があった生徒たちが、「キャリアＤ」において様々な活動を体験したり、教師たちや学習支援員から細やかなサポートを受けることによって成長する姿が見られた。

①全校生徒には、自由選択科目群の中の選択科目の一つとして認識されており、特段違和感もなく受け入れられている。

生徒を対象としたガイダンスを実施したことによって、生徒及び保護者に「キャリアＤ」の実施に関する理解は得られていた。

②「キャリアＤ」開講初年度の指導者からは、「表情や他者とのやりとりから、生徒の成長が感じられる」、等の肯定的な意見が多かった。本年度の指導者からも、「生徒が自発的に教師の手伝いをしたり、自分の意見を述べようとしている」、「適切な～の仕方等、コミュニケーションを図る上で大切なことを体験を通して学び、自分でもできるようになったと感じられている」といった意見が得られている。

③継続的に実施してきた全校生徒対象の「学校生活アンケート（学校生活の満足度を測る）」への回答結果は、他生徒の方が受講生より伸びており、両者の数的な差が大幅に減少することはなかった。しかし、「キャリアＤ」受講による効果は生徒の姿、感想、教師の所見において確認することができた。

受講によって自分が成長した点について書いた作文では、生徒が自身の成長を感じている姿が見られた。「以前は特定の人にだけ話しかけていたが、少しでも他の人に話しかけようとするようになった」、「以前よりは人と話すことが得意になった」、「１分間スピ

ーチや会話練習の時に、苦手だった相手の顔を見ることができるようになりつつある」等、自分の苦手さが軽減したと生徒自身が感じていた。

また、「このままではいけない。少しずつ変わっていかなければ自分のためにならない」という感想もあり、自己理解が深まり、自身に必要なことを自覚するようになっている。

受講当初と現在について比較する自己評価では、人との接し方の基本ルールの理解や困ったときに人に助けを求めるスキルの理解が深まったことが、生徒に共通して見られた変化であった。

④第３学年受講生が受験準備の際に、自分の苦手さを理解して得意な方法で自己表現をしようとする姿や、認知の幅が広がって肯定的な発言をする様子を教師が確認している。「キャリアＤ」受講による自己理解の深化だけでなく、小さな成功体験の積み重ねによって醸成された自信と意欲や他者への信頼感が向上していると考えられる。

⑤第３学年は、２年間で多くのペア及びグループワークを行ってきた結果、受講生徒間の交友関係が構築され、ピアサポートともいえる相互理解と相互サポートが促進されている。グループ協議においての役割分担や協議の進行において、他者に対する働きかけが自然に行われており、生徒の成長を確認することができた。

⑥第３学年継続受講生は、本年度から受講し始めた生徒に対しても、継続受講生が会話練習等において臆することなく話しかける姿も見られており、コミュニケーションに対する意欲的、積極的な態度が醸成されてきたことがわかる。

⑦第２学年については、生徒の感想において、校内就労体験や感覚運動等を通して自分ができるようになったことを挙げており、小さな成功体験を積んで少しずつ自信を深めていることが窺える。

⑧第２学年受講生のクラス担任や他の授業担当者からは、授業で発表することへの抵抗感が軽減していることや会話がスムーズに展開できるようになりつつあることが報告されている。

イ　教師への効果

(ｱ) クラスでのＩＬ及びＳＳＴ指導について

①教師のまとめアンケートにおいて、「生徒の言葉や行動をよく観察し、不適切なものがあれば表面だけでなく、その奥の気持ちまで踏み込んで改善できるようにしていきたい」、「すべての生徒にとって有効である」、「授業の中でコミュニケーション能力を養えるように工夫していきたい」、「生徒に好感の持てる挨拶を徹底させたい。不適切な言動があれば、見過ごさずにその場で即指導していきたい」といった意欲的な感想が得られ、指導の必要性を教師が感じていることがわかる。

②教師自身がクラスの生徒との関係づくりにおいて、自分自身が日常の指導においてソーシャルスキルを身につけておく必要性を感じている感想もあり、教師自身が自己を振り返る機会ともなっていると判断される。

(ｲ) ＩＬ及びＳＳＴ講演会について

教師の感想の中に、生徒を惹きつける話し方や具体例を用いたわかりやすい説明の仕方が参考になったと複数の教師が述べていることから、教師のスキルアップの場となっていると判断できる。

また、講演の内容を日常の指導において活かしていこうとする姿勢も見られ、キャリア教育の必要性を教師が再認識する機会になっている。

(ｳ) 「キャリアＤ」指導について

①受講生を決定するまでの過程において、生徒の実態・教育的ニーズについて学校全体での共通理解を図ることができた。履修を希望している、あるいは教師が履修が望ましいと考える生徒に関して、職員研修会等でＷＧが生徒の実態を確認した上で、生徒と保護者に担任（学年主任）とＷＧ担当者が個別面談を実施して最終的な受講生を決定した。

②複数の教師がチームを組んで指導に当たることで、生徒の課題や支援の効果を教師間で共有し、生徒の教育的ニーズに応じた指導の必要性を共通理解することができた。また、教科や立場が異なる他の教師とのティームティーチングによって、幅広い視点の生徒理解が促進されている。個々の生徒の課題に気づく視点が広がり、生徒の教育的ニーズに応じた指導を教師が意識するようになっている。授業内外での生徒に対する言葉かけや職員室での教師間の情報交換の中にその様子が窺える。
③職員会議等で授業経過や生徒の変容を伝え、生徒理解や生徒支援に関する教員間の共通理解を図った。その結果、職員朝礼で授業への協力を依頼したり、予定を報告したところ、担当以外の教師が積極的に生徒と交流を図るなど、生徒支援に関する教員の意識の高さが窺えた。
④校内就労体験等の取組では、教師以外の職員が生徒を指導することによって、生徒の実態を職員も理解し、学校全体での共通理解・生徒支援が推進されている。
⑤授業において生徒の苦手意識が改善されたり、生徒が自信を深める姿を確認することによって、教師自身の意欲が喚起されていた。また、自身の教科指導にキャリアＤにおける指導法を活用できていると感じている感想も得られた。

(ｴ) 授業づくり
①本年度は、「福岡県人権教育研修会（県立学校公開授業）～学力と進路の保障～」を本校において実施した。教科毎の指導案は、生徒の実態に応じた配慮が組み込まれたものであり、授業づくりにおいての教師の生徒理解が進んでいることが窺えた。
②教師の意識調査において、指導上特に意識している点や工夫している点として、「授業での話し方、説明の仕方がわかりやすいように意識している」、「生徒にわかりやすいように・伝わるようにほめている」、「授業の流れをパターン化して、最初に手順を示している」と、生徒の視点に立って、指導上の配慮や工夫がなされていることがわかる。

(ｵ) 教師の意識
研究開発前から本校に勤務している教師を対象とした研究開発前後の意識の変化を確認するアンケートでは、「特別な教育的ニーズがある生徒に対して、自分なりに対応・支援を行っている」が３５％から９５％に向上し、「特別な教育的ニーズがある生徒に対して、校内で共通理解を図って、適切・具体的な支援が行われている」が４５％から９５％に向上している。本取組における継続的な研修会、様々な取組の実践による生徒の変容がもたらした、教師の意識の変容につながったと考察される。

ウ　保護者等への効果
(ｱ) ＩＬ及びＳＳＴ
①入学式等で、本校の取組についての説明を保護者に対して行い、家庭の理解と協力を依頼している。本校の教育目標は社会で通用する人材の育成であり、そのために必要な取組であることを伝え保護者の理解は得られている。
②本年度は、２学年のＳＳＴ授業を公開授業として、保護者、県内の高等学校、及び近隣の小・中学校に案内しており、ＳＳＴの必要性や重要性の理解促進につながっている。

(ｲ) 「特別な教育的ニーズ」のある生徒への理解
①地域の教育関係者及び関係機関を対象に、発達障害の当事者の方を招いて講演会を開催した。参加者の感想より、教師自身が自分の指導を振り返って、個々の生徒の教育的ニーズに応じた指導の必要性を感じていることや、今後の指導において生徒の特性を理解した上で、必要な生徒支援を行うといった意欲の高まりが見られた。
②生徒、教師、保護者及び地域の教育関係者を対象とした教育講演会をこの３か年実施することで、特別な教育的ニーズをもつ生徒について理解を求める啓発を行った。特に、発達障害の理解を求める文書を作成して保護者及び生徒向けに発行した。その際、クラス内で説明する資料については、事前に教師間で共通理解を図り、生徒に配付しており、生徒・保護者

への理解が深められたと考える。
③本校の取組を理解するＰＴＡの企画で、保護者向けの発達障害に関する講演会も実施し、４０名程度の保護者が参加したことによって、一部ではあるが保護者が特別な教育的ニーズのある生徒への理解を深めたといえる。
④キャリアＤ受講生の保護者に対しては、公開授業や生徒がプレゼンテーションを行う授業への参観について案内し、理解を求めた。２年次末のプレゼンテーションでは、６名の受講生のうち２名の保護者、１名の学習支援員、及び生徒に招待された６名の教師が生徒の様子を参観し、生徒が意欲的に授業参加をしている姿を確認することによって、キャリアＤの効果が理解された。
⑤キャリアＤ受講生徒が教師と共に作成した「ライフプランシート」（在学中に身に付けるべきこと、自身の長所・短所や課題についてまとめたもの）を保護者が確認する機会を設定したり、様々な研修会等の案内を行って情報提供にも努め、学校と保護者との共通理解を図ることができた。

⑵ 実施上の問題点と今後の課題

ア　ＩＬ及びＳＳＴについて

(ｱ) ＩＬとＳＳＴへの取組による一定の効果は、生徒たちが本校において授業規律やマナーに関して継続的な指導を受けていることや、生徒一人一人を大切にする人権教育と生徒支援の視点に基づいた細やかな指導に支えられていることによって得られたものである。ＩＬ及びＳＳＴ指導だけによる効果ではなく、様々な取組と同時に実施していくことによって、その効果は期待されると考察される。

(ｲ) 本校において、生徒や教師へのＳＳＴへの意識の高まりは明らかであるが、実際には、スキルの確実な定着までに至っていないことが教師の感想から窺えた。生徒がＩＬ・ＳＳＴに積極的に参加し、指導内容を理解して自己理解を深めていると感じている教師は、全学年平均８割以上であるが、生徒が成長・変化していると感じている教師は、７割程度であり格差が見られる。
　ソーシャルスキルの必要性を生徒と教師が理解し、スキルを定着させて日常生活で活用できるようにするためには、クラス単位のＳＳＴ指導だけでは不十分である。ＩＬ・ＳＳＴで行ったことを日常の指導の中で生徒に意識させ、学んだことを日常生活において活用できるようにすることでスキルは定着すると考えられる。そのための指導上の工夫を一人一人の教師が行うことが求められる。

(ｳ) 指導する教師の継続的な学びとスキルアップは不可欠である。人事異動等で初めて担当する教師にとっては、４月からＩＬやＳＳＴを指導するための事前準備を行う時間の確保が困難であった。実施目的を理解せずに、十分な知識・経験及び指導スキルが身についていない時期から指導は始まっている。
　今までに指導経験のある教師にとっても、教材研究や指導上の工夫のための事前準備の時間確保は課題であった。
　ＩＬ及びＳＳＴのための研修会を毎年設定することが必要であり、教師が事前準備を十分に行うために、年間の指導案を年度当初に提示する等の工夫が求められる。

(ｴ) 指導するテーマの選択については、生徒の実態に応じて学校行事に関連したものを、各学年の共通理解の下に決定すべきである。また、ＳＳＴはキャリア教育の一環であり、他の進路学習と共に総合的な学習の時間に実施したが、生徒の進路先が多岐にわたる本校においては、進路学習の時間の確保も必要となるため、キャリア教育の一環としてのＳＳＴを含めて、３年間を見通したシラバスの作成が必要となる。

イ　「キャリアＤ」について

(ｱ) 履修の動機づけとなるＩＬを実施する際は、生徒の十分な自己理解が不可欠である。１

５回前後ＳＳＴを実施するだけでは、特別な教育的ニーズのある生徒自身が、履修の必要性を感じるまでに至らないことがある。

教師が履修を勧めても、自己理解が不足しているためか履修しない、あるいは、自己の課題を受容できないために履修を拒むといった場合があった。

「キャリアＤ」において受講生の多くが体験活動を通して自己理解や他者理解を深めたことから、ＩＬにおいてもボランティア活動や就労体験等の体験活動の場を設定して、自己への気付きを促す必要がある。

さらに、高校段階からだけでなく、義務教育段階から自己理解を深める機会をできる限り設定する必要があると考える。

(ｲ) 履修については、生徒ガイダンスと共に保護者を対象とした説明会を設定し、生徒だけでなく保護者にも、履修の必要性が理解される必要がある。

また、生徒間・教師と生徒間の関係構築、学んだスキルの定着、及び進路選択準備のためには継続履修が望ましい。指導する担当者についても、可能な限り同じ教師が継続して担当することが期待される。その理由としては、２単位という時間の中で実施できることは限られており、時間の確保と効率よく授業を展開していくことが必要なためである。

(ｳ)「キャリアＤ」履修予定の生徒たちの教育的ニーズは多様であり、生徒のアセスメントを行い、指導内容の修正あるいは新たなシラバスや教材を作成する必要がある。

生徒や保護者とライフプランシートを用いた定期的な協議を行ったり、目標達成のために必要な指導や支援の検討と修正を実施したりする機会を、年間計画の作成段階で設けることが必要である。一人一人の生徒の教育的ニーズを見極め、適切な指導を行うことが最大の課題である。

(ｴ) それぞれの生徒にとって自立活動のどの項目が有効であるかを判断するには、自立活動の指導経験のない教師だけでは不十分である。特別支援学校の協力を得て、自立活動の指導に関する研修を行う必要がある。

教師の感想の中には、「自己理解ができている生徒とそうでない生徒の差が大きいため、自己理解ができている生徒のニーズに十分に応えられていない上に、また、自己理解が不十分な生徒が授業内容を日常に十分生かすことができていない印象を受ける。自己を理解し、自尊感情を持たせることは難しい」といったものもある。生徒に共通する課題については、生徒に応じて難易度を変えたり、個々の生徒特有の課題については、それぞれの生徒が個々で活動できるような工夫が必要であると考察される。

(ｵ) 連続した２時間の授業だけでは、自立活動を取り入れたＳＳＴ及びＬＳＴの十分な演習及び体験活動等を行うことは難しいため、長期休業を利用する等の設定が必要となる。

また、学習に関する補充指導についても、特性と課題に応じた学習指導の時間を十分に確保できない。別途、学力補充の時間を確保する必要がある。

さらに、入学後の早い時期から、生徒に学習方法に関する指導を開始し、生徒自身に自分の学習上の課題等にも気付かせて、改善の必要性を理解させる必要がある。

(ｶ) マンツーマン、ペア及びグループ活動を行うためには、複数の担当者を確保する措置が必要である。教科の授業数の軽減措置がなく、担任業務・分掌業務・部活動等の指導がある状態であれば、担当者の負担は大きい。

ウ　授業づくりについて

(ｱ) 入学してくる生徒の学力格差は拡大傾向にあり、分割授業や少人数指導の必要度が高くなっている。本研究においても各教科での少人数指導の実施を予定していたが、限られた教員数での対応には限界があり、実現には結びつかなかった。

今後は、学習支援員等の活用の在り方を学校全体で検討し、放課後だけでなく授業にお

ける補助としての活用も考慮する必要がある。地域の人的資源を有効に活用することについて学校全体で協議して共通理解する必要がある。

(ｲ) 中学とのつなぎ教材の活用には多くの課題がある。教師の中には、つなぎ教材を使用することが、高校段階での学習を学ぶ時期が遅れ、大学受験のための準備の遅れにつながることを懸念する声がある。

また、生徒間の学力差が大きく、つなぎ教材活用の必要性が高い生徒とそうでない生徒が存在しているため、今後は、生徒の習熟度に見合った教材の選択や習熟度別授業等の指導形態にも配慮が必要であると考えられる。

本校においては、生徒の学習意欲に関する課題も存在している。前年度と本年度に実施したつなぎ教材の活用について第１学年を対象としたアンケートからは、中学時にわからなかったことが理解できるようになっても、学習意欲が向上したという生徒は５～６割程度に止まっていた。生徒の学習意欲を喚起し、基礎学力の定着と自発的学習の促進は、３か年のキャリア教育の推進には欠かせないものである。

この背景には、生徒を取り巻く物理的な環境が大きな影響を与えていると考える。本校が位置している地区においての経済状況や家庭環境の厳しさから、生徒にとって学習の必要性を感じる場面が限られており、学習への意欲を喚起することが困難な一面もある。

以上から、実施時期、使用する教材、及び指導方法や指導形態について再考し、校内・各教科で共通理解を図って、基礎学力の定着と生徒の学習意欲の喚起を強化する必要がある。

さらに、多様な生徒の課題を意識しながら、生徒の実態に応じた効果的な指導を行うためには、教師自身の継続的な学びと指導技術の向上が不可欠である。そのためには、適切な職員研修会を設定すべきである。

エ　理解及び啓発について

(ｱ) 教師については、キャリア教育の視点に立って、年間を見通した継続性のある目標設定を行い、ＩＬ、ＳＳＴと「キャリアＤ」それぞれの意義と位置づけや、相互の関連性について教師が十分理解した上で指導に当たる必要がある。人事異動等で教師が入れ替わっても、生徒理解や生徒支援に関して教師間で意識のずれが生じないよう、学校全体での支援を継続していくための研修会、職員会議等の設定は不可欠であると考える。

(ｲ) 発達障害を含む特別な教育的ニーズに関する講演会を実施することで、全校生徒、保護者、及び地域の教育関係者等に対して発達障害、自己理解、及び他者理解について理解を促すことができた。

一方、年間１～２回の講演会だけでは、生徒の自己･他者理解の深化にはつながらない。１年次より本年度まで毎年、講演会を実施して発達障害等に関する知識を深めさせたが、本年度に、「全く知らなかった」と回答する生徒すら見られることから、継続的に生徒に対して、障害理解を含めた自己・他者理解に関する指導を行っていくことが必要である。

また、保護者に対しても、今後の保護者会やＰＴＡ新聞等を活用し、継続的に働きかけをしていく必要がある。

オ　環境づくりについて

特別な教育的ニーズのある生徒だけでなく、すべての生徒が学校生活に適応していくための環境づくりが必要である。

(ｱ) 教室等の掲示物や案内が誰にとっても見やすく、わかりやすいようにする物理的整備は、生徒に安心感を与え、新しい環境に慣れる上での不安も減じることができる。

(ｲ) 生徒が安心して過ごせ、適切な指導や支援が受けられる環境を整えるのは、学校・教師であり、常に教師がそのことを意識する必要がある。そのためにも、生徒に関する情報を幼稚園・保育園から進学先または就労先へと引き継いでいくことは不可欠である。生徒が学校や社会生活に適応し、その自立や社会参加をスムーズにするためにも、「ふくおか就学サポートノート」（福岡県・福岡県教育委員会作成）のような継続的に情報を引き継ぐツールなどを活用し、情報の引継ぎと活用を自発的・積極的に行っていくことが望まれる。